

あべこべ草紙——師・安西均さんの思い出に

望月苑巳

春はあけぼの、などとうっかり間違つて書いた
その人は

頭を搔きながらぺろりと舌を出した。

東山のあけぼのは初夏に限る

たわけごとのせいか

眠気は待つてくれないので困ると言う。

氷菓子をくわえて

浜千鳥が揺れる小旗をくぐつて

浴衣の少女がふたり

ねえ、今日はブランコに乗ろうよ

あの公園には嫌な奴がいるから行きたくないわ

そんな会話をなめあう。

緩い風がさらつていく

杜若が小さな池で自己主張をしている

蝸牛はのっそりと葉脈の道をなぞる

空にはセスナ機が旋回して 女の聲を散布してゐる*1

サッカーボールを抱えた少年が通りかかって

宿題はもうすんだのかいという

少女たちはアツカンベーをした

ボールを当てるふりをして

少年は先生に言いつけてやろうと捨てゼリフ

向日葵が花火のように咲いて

子どもたちが砂場で相撲をとっている

盆踊りの会場は出来上がったばかりだ

蝉の声で埋め尽くされる東山が

足の長い午後をかくす。

あべこべだった方がいい場合だってあると
賢者は言った

噂によればあれは「夏はあけぼの」と書いたつもりだったのに
道長さまが声をかけてきたので手が滑ったのだという
枕草子を枕にじつとりと汗をかきながら昼寝
眠る進化論の夏もよからう

どこですり替わったのかのかは謎だが

戦争の見える青春といふ展望臺で*²

子どもは無邪気に遊んでいるのがせめてもの幸せ。

*

その人は月の輪で寂しく亡くなったと人づてに聞いた。

(*1) 安西均「奈良公園」から。(*2) 安西均「寂光院」から。

*清少納言は京都郊外の月の輪というところで没した